

# 心に残るいい話

もう12月？あっという間に1年が経とうとしています。みなさんは、どうお過ごしでしたか。コロナ禍での窮屈な生活、テレビからは自然災害やウクライナの悲惨な光景が飛び込んできて、心を痛めます。今月号では、「心に残るいい話」を4人の方に書いていただきました。「ほっこり」した気持ちで心穏やかに1年を締めくくられたら幸いです。

## 病に打ち勝った母

新藤 綾子さん（関沢3）

母は40代後半のときに背中にできものができ、病院に行ったところ、「がんの一手手前」と言われ、左乳房全摘の手術を受けた。私たち姉妹は小学校低学年、妹は入学前だった。当時の母の心境を察すると、大変なものだったと思う。母は、「まだ子どもが小さい。この子たちを残して死ねない」と、病と戦った。退院後も何回か病巣が広がり、即手術ということもあったが、何とか乗り越えることができた。母は強い人だったと思う。大人になってから、あれは全摘だったし、消滅はしたがリンパ節に転移もあったので、先生ははっきりとは言わなかったけど、乳がんだったのだと確信した。幸い再発もなく、86歳まで生き抜くことができた。

あのとき、母が亡くなっていたらと思うと、病に打ち勝った母に感謝するとともに、健診の大切さを思う。



## ふと出合ったカマキリに

松島 和幸さん（関沢2）

自由の身になり11年と半年が過ぎました。その時から高齢者の学び及び、交流の場である水曜学級に加入し今日に至っています。わたしは運動に関してこれといった特技はありませんが山歩きはよくやっていた。最近ではコロナの影響でこの趣味からも遠ざかっています。それでも歩きは人一倍あるいはそれ以上と思っています。埼玉県「コバトン健康マイレージ」に入り日々歩いております。1日の目標を1万5千歩と決めほぼ達成しています。ほとんど毎日交流センターに通い万歩計にログインしております。交流センターの行き帰りで2千歩を稼ぐことになります。

ある日、交流センターへの道で真ん中あたりにカマキリが苦しうにもがいている場面に遭遇しました。「これはかわいそう、車にひかれちゃうよ」と思いこわごととカマキリをつかみそばの植え込みに運びました。「車にひかれることは無いけどそんなに寿命は残ってないよな」と思いながらも「カマキリにとって少しはよかったのか」とも同時に思いました。帰りに植え込みのあたりを探しましたが姿はありませんでした。



## 心の感謝状

松田 明典さん（鶴瀬西2）

数年前、紅葉が美しい故郷の旅館で歳を祝う中学の同級会が開かれた。どこか昔の面影を残す顔、全く別人となった女子たちの顔。

半世紀ぶりの再会を楽しむたくさんの輪の中に突然、実行委員長が私に「一番遠いところから来てくれたので締め挨拶をして欲しい」と耳打ち。記念写真撮影から来賓恩師の挨拶、乾杯と祝賀会は進むが、挨拶が気になり楽しめない。ふと、昔、職場の職員研修会で講師がしたエッセー「心の感謝状」の朗読が心に残っていたのを思い出した。挨拶の時から来て、同級生たちの前に進むと、目の前には人生の荒波を乗り越え、自分の人生を切り開いて来た元気でたくましい良い顔々が並んでいる。



挨拶を始める。「同級生の皆さんに心の感謝状を贈ります。心で

お渡ししますので目を閉じてお受け取りください」と両手で形のない感謝状を掲げ読みあげる。

「感謝状 あなたは、今日まで家庭を守り、地域、社会を守り、良き家庭人、社会人として立派に生きてこられました。ここに、その功績をたたえ、これまでの労苦と頑張りに対し心の感謝状を贈ります」と読み上げ、両手で心の感謝状を差し出した。同級生達は目を閉じ両手を前に差し出して感謝状を受けとり、一礼し、折りたたくて脇に抱えた。

「今までの頑張り苦勞が認められ思わず涙が出た」「初めて褒めてもらった」「賞状は卒業式以来でうれしかった」思い出話で懇親会は深夜まで続く。

コロナ禍、あなたも大切な人に「心の〇〇」を贈ってみませんか。



## 10年前のクリスマスイブ

山田 満紀子さん（鶴瀬西2）

私と4歳の長男と1歳の長女は、姉親子と遊園地で思いっきり遊び、帰りが少し遅くなってしまいました。当時は三芳町藤久保に住んでいたため、鶴瀬駅から自宅までは大人の歩く速さで徒歩15分くらいの距離を、私は1日遊び疲れてぐずぐずの長男の手を右につなぎ、左は長女が乗ったベビーカーを押して歩いていました。

そこに老夫婦が通り、「あらあら、男の子が疲れて泣いちゃっているね。家は、どこ？ベビーカーを押して行ってあげるよ」と、声かけをしてくれました。住所を伝えると、老夫婦はたまたま我が家の裏にお住まいの方たちでした。「家が近いから、ベビーカーを押してあげるから、お母さんは泣いている男の子を抱っこしてあげてね」とおっしゃっていただき、本当に助かりました。お言葉通り家の前までベビーカーを押していただき、老夫婦は「メリークリスマス！」と言って去って行きました。私にとってはその老夫婦は本当のサンタクロースのようで、温かい気持ちが胸いっぱいになりました。

10年前はちょうど家を建てる土地を和光や志木でいろいろと探していた時期です。この出来事や当時の我が家のご近所さんが温かい方たちばかりだったため、家を鶴瀬に建てることに決めました。

## サンタさんからのエール



イラスト/萩原編集委員

サンタさんのエール 大切にすることからね。